

# 日本語学習者による多義動詞を中心語とするコロケーションの習得

大神, 智春

<https://hdl.handle.net/2324/1959200>

---

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (芸術工学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名：大神 智春

論文題名：日本語学習者による多義動詞を中心語とするコロケーションの習得

区 分：乙

## 論文内容の要約

序章では、本研究の背景と目的を述べた。日本語教育においては中級レベル以上になるとコロケーションの理解と使用が重要な学習項目の1つとなっている。しかし、日本語教育では、母語転移の観点からのコロケーション習得研究は行われているが、その他の観点からの研究はまだ十分に行われているとは言えない。本研究では、1つの多義動詞で形成されるコロケーションの習得に焦点を当て、多義動詞「とる」で形成されるコロケーションを通して、上級学習者がコロケーション習得においてどのような中間言語を構築しているか明らかにすることを目的とした。

第1章では、コロケーションの定義、コロケーション習得研究、語の意味習得研究、語の意味習得研究に用いられている理論の観点から先行研究を概観した。

第2章では、本研究における研究課題、内容、方法について述べた。本研究では具体的には以下の点を研究課題とした。

- (1) 日本人大学生が抱いている「とる」のプロトタイプを調査し、結果を本研究における日本語母語話者のプロトタイプと位置付ける。
- (2) 多義語のコロケーション習得における中間言語について以下の点を明らかにする。その際、理論的アプローチとして、概念形成理論（田中・深谷 1998）の「典型化」「一般化」「差異化」の枠組みを援用する。補助概念としては「語彙知識の広さ」「語彙知識の深さ」「語彙のネットワーク知識」を用いる。
  - a) 「典型化」：学習者が考える「とる」のプロトタイプはどのようなものであるか。
  - b) 「一般化」：学習者が「とる」の多義性をどの程度習得し各語義で形成されるコロケーションをどの程度理解しているか。「語彙知識の深さ」及び「語彙知識の広さ」の視点を取り入れ分析する。
  - c) 「差異化」：「とる」と類義語との使い分けがどの程度できるか。「語彙のネットワーク知識」及び「語義知識の広さ」の視点を取り入れ分析する。

被験者は、九州大学に所属する留学生で、中国語母語話者（CNS）と韓国語母語話者（KNS）を調査対象にした。

第3章では、調査対象語とする「とる」の意味分析を行い、認知言語学的視点から各語義の意味関係を整理した。

第4章では上記の課題(1)について調査・分析を行った。その結果、JNSは「とる」のプロトタイプを語義1（把握）だと認識していることが明らかになった。また、JNSは「とる」の意味がプロトタイプである語義1（把握）からどの程度乖離していると感じられるか、そして共起名詞がどの程度具体的か抽象的かでプロトタイプから各語義までの位置を判断していることが明らかになった。

第5章では(2)のa)「典型化」について調査・分析を行った。その結果、CNS、KNSともに「とる」の「最も基本的な語義」を語義2（獲得）だと考えていることが明らかになった。使用頻

度の高い共起語についても語義2（獲得）に属するものを多用していた。学習者は上級レベルではまだプロトタイプを作り上げてはおらず、教科書や授業で得た知識を基に日常生活で使用しつつ一般化した「学習基本義」を中心に据えていると考えられる。習得が進むと「学習基本義」も様々な事例の1つとして取り込みながらプロトタイプを形成していくと考えられる。

第6章では b)「一般化」について調査・分析した。CNSもKNSも用法2（獲得）を中心とし、用法2（獲得）だけではなく用法1（把握）、6（生産）、8（占有）、7（測定）、3（離脱）の理解を進めていることが明らかになった。本研究より「語彙知識の深さ」においては上級レベルになると習得が進むことが明らかになった。ただし、学習者が知っている共起語は量的に限られており、「語彙知識の広さ」の習得については発展途上であることが観察された。尚、用法によってはCNSとKNSとで理解度に相違が見られるものも観察されたことから、母語知識は個々のコロケーションの習得速度に影響を与えられられる。

第7章では c)「差異化」に焦点を当て、「とる」と類義語の使い分けについて分析を行った。

終章では全体的なまとめを行った。学習者の中間言語を「点」と「線」、「面」で表すと、中級レベルは各コロケーションの用例を「点」として習得する段階であり、上級レベルでは多義性知識を「線」として伸ばし共起語を「面」として広げつつある移行期であると考えられる。

今後、縦断的研究を行うことで学習者の中間言語の発達の側面を明らかにする必要がある。被験者については、非漢字圏の学習者も対象に調査を行いCNS・KNSと比較することで学習者の中間言語をより明確に解明していきたい。